エジプト・ダハシュール北遺跡における 神官夕の神殿型貴族墓のジェド柱

吉村 作治, 西本 真一, 馬場 匡浩, 矢澤 健

要旨

サイバー大学と早稲田大学との合同調査によってダハシュール北地域の発掘が進められており、タの墓からは古代エジプトのラメセス時代に特徴的な建築表現のひとつであるジェド柱が見つかっている。聖刻文字や、レリーフとしてあらわされている被葬者の立像が示す向きなどに注意しつつ接合作業を進めた結果、この墓の北側に2本のジェド柱があったらしいことが明らかとなった。反対側にも同数の柱が立っていたと考えるのが自然であり、合計で4本のジェド柱がこの墓の四角い中庭の奥には備えられていたことが考察される。

キーワード: 新王国時代 (New Kingdom), サッカラ (Saqqara), 墓域 (集合墳墓 (Cemetery)), 復原 (Reconstruction), 建築 (Architecture)

1. はじめに

エジプトのダハシュール地域は、古王国時代のスネフェル王が建てたふたつのピラミッドが残っていることで良く知られている。中王国時代に至ると、アメンエムハト2世、センウセルト3世、アメンエムハト3世といった王たちも当地にピラミッドを造営した。

こうした王たちの葬祭建築の周りには、多数の貴族墓が造営された。古王国時代や中王国時代における貴族たちの墓は「マスタバ」形式で、これは長方形の平面を有する構築物を地上に築き、地下には岩盤を掘削して玄室を設けるかたちの墓である。しかし、これより簡素な形式のシャフト墓もまた数多く散見され、結果として広大な墓域がダハシュールにはいくつも形成された様態を呈している。エジプト学が成立した19世紀においてはすでに、これらの墓域の存在は上記のピラミッドとともに認識され、報告書の地図上に記された。

ただ当時は、詳細な発掘調査が逐次なされたのではなく、広域を踏査しておおまかな記録をおこなうことが主であったから、個々の遺構の正確な時代判定に関しては不明な点が

原稿受付日: 2010 年 1 月 16 日 原稿受理日: 2010 年 1 月 22 日

サイバー大学・学長, サイバー大学世界遺産学部・教授, 早稲田大学エジプト学研究所・次席研究員, サイバー大学・助手

なかったわけではない。

現在、ダハシュール地域ではドイツ隊やアメリカ隊など、いくつもの調査隊が活動を続けているが、彼らが調査対象として主眼に置いているのは、もっぱら古王国時代と中王国時代の遺跡に限られている。ダハシュールという地域は古王国時代と中王国時代の遺構が集中する場所であるという、19世紀から続いてきた認識は、近年まで大きく変わることがなかったのであって、これを大きく変えたのが日本隊による新王国時代の墓域の発見である。

早稲田大学と東海大学が共同して 1990 年代の半ばから開始した新たな調査は、エジプト学界のこうした通念を覆す成果を導いた。人工衛星から得られた地球上の情報の分析を通し、新たな遺構を探索するという試みの中で、最も有望の地とされたのがダハシュールであり、現地での発掘調査がおこなわれた結果、新王国時代に属する大規模な神殿型貴族墓(「トゥーム・チャペル」とも呼ばれる)が発見されたのである。当該墓域の位置は、すでに 19 世紀のレプシウスによる報告でも簡単に触れられていたのだが、これまで誰も、ダハシュールという地に新王国時代に属する本格的な墓域があるなどとは考えていなかった。2009 年になされた最新の発掘調査においては墓の数はすでに 100 基を優に超えており、これらの中には中王国時代に遡って造営されたシャフト墓なども含まれるが、古い墓域の上に覆い被さるようにして築かれた新王国時代の葬祭施設の様相が、次第に明らかにされつつある。

ダハシュールで見つかった新王国時代の神殿型貴族墓のうち、重要なのはイパイの墓、パシェドゥの墓、そして夕の墓の合計3つである。それぞれ、すでに各墓の概要に関してはさまざまなところで発表されており、平面図の考察もおこなわれているが、ここでは夕の墓(図1)に注目し、その復原過程をさらに詳しく追究してみたい。ここで重要となるのは、ラメセス期とも呼ばれる第19・20王朝に特徴的なジェド柱(後述)の断片が多数出土している点であり、この四角い柱の復原に際しては、浮彫で表現されたヒエログリフ(聖刻文字)と図像の向きに関する法則性を勘案しながら考察をおこなう必要がある。立体的なパズルの接合を進めるとともに、文字や図像の向きを判別することによって、夕の墓のどこに元来はこのジェド柱が置かれていたのかを推定することができ、その結果からはさらに、失われて見つけることができなかった他の同類の柱の存在と本数にまで及ぶ問題が提起されよう。

新王国時代の貴族たちによって盛んに造営された神殿型貴族墓についての研究が開始されてからまだ日は浅いと言いうるが、この復原の問題は、精緻に組み立てられているエジプト学の研究の蓄積に基づき、どのような知識が建築遺構の復原作業に関わり、また利用されるかが如実に示される典型例と思われ、まずはジェド柱なるものの簡単な説明をおこなった後に、実際に検出された具体的な断片を紹介し、最後にそれらを総合して検討する考察を述べることとする。

2. ジェド柱の概説(1)

「ジェドdd」と呼称されるものは聖刻文字の中にもうかがわれ、王位更新祭においては 王によってそれを立てる行為が一連の儀式に含まれることなども了解されているのである が、興味深いことに、重要性は了解されつつも、これが一体何を意味しているかについて は今なお、ほとんど明らかにされていない。古代エジプトの石造建築には最も早い時期か ら装飾としてうかがわれるものであり、ネチェリケト王のピラミッド・コンプレックス (第 3 王朝) では高窓の竪格子などでこのモティーフがすでに用いられている。

新王国時代に至ると、貴族たちが地表に小さな神殿型の墓を建てるようになり、ここにはかつて王墓の形式として採用されたピラミッドが、規模を著しく縮小させながらも建物の最奥部に造営されるという大きな特徴が観察される。この小さなピラミッドは、神殿型貴族墓が造られるようになった初期の時代には最も奥まった場所の中央にある祠室の上に築かれたが、構造的に支持することの困難な点が意識されるようになり、やがては平屋根の上から降ろされて祠室の裏手に位置する地表面に設けられる形式へと変化した。小ピラミッドの位置によって時代の判定がある程度可能であるという見解は、研究者たちの間で受け入れられていると考えて良い。

新王国時代に属する神殿型貴族墓の形式に関するこのような時代の判別方法は、メンフィス地域における一群の墓、特にツタンカーメンに仕えていたホルエムへブやマヤといった高官たちの葬祭建築が発見されたことによって、研究が強く促されたといっても過言ではない。エジプト学では主として碑文が年代判定を左右し、また装飾に対する美術史学的な判断と土器の編年による既知の体系がこれに次いで重要であるが、神殿型貴族墓の場合、建築学的な形式によっても大まかな時代を言い当てることができるまでになっている。たとえ、すべての壁面装飾が完全に失われており、満足な遺物も出土せず、わずかに基礎部分しか残存しない遺構であっても、小ピラミッドの痕跡が建物の最奥部分の地表に認められればラメセス期に属するであろうことが指摘できるわけであり、エジプト学における建築研究ではこうした点が画期的である。

ジェドをモティーフとした角柱の有無も、神殿型貴族墓に関する研究においては同等の意味を有すると考えられる^②。傾向として、それは墓がラメセス期に造営されたことを示す指標と考えられるのであって、新王国時代の大規模な葬祭殿と同じく、神殿型貴族墓の四角い中庭の一面、三面、あるいは四周に列柱が立ち並べられる場合を見ることができるが、ジェドをモティーフとした柱は中庭の奥にうかがわれるのが一般的である。

3. ジェド柱断片の判別

3.1 ジェド柱片と梁片との区別

古代エジプト建築における角柱は、上へ行くに従って細くなる形状を呈することがなく、

上から下まで同じ断面形を有する。円柱、あるいは東ね柱型などの形式とは大きく異なる点である。頂部にカヴェット・コーニスを載せた祠堂型を呈する細長い基台の場合には、緩やかな傾斜が側面に施されるために、あたかも細すぼまりの長方形断面の柱のような外観を見せるが、混同すべきではない。

正方形断面の角柱の上に載って支承されるアーキトレーヴもまた,正方形断面を示すことは良くうかがわれ,この場合,もし文字や図像が柱やアーキトレーヴにまったく見られない場合には、柱かそれとも梁かという判定はたいへん厄介なこととなる。装飾が刻まれていない未完成の段階の建築材が発見された場合には、こうした区別については水平装飾帯としてのトーラスの痕跡が見られるか、あるいはかすがいの痕跡が残存しているかといった観察結果が重要となるであろう。

タの墓から出土した建築材に関しては、幸いなことに判断に迷う場合はきわめて限られた。

隅角部を有する石灰岩片が集められたが、文字や図像の向きを考えて、柱と梁との区別が最初になされた。柱の断片と想定された一群の断片については接合作業を進め、断面が長方形の角柱部分をひとつだけ組み上げることに成功し(断片 1、後述)、これによって四角い独立柱が夕の墓に存在したことが明らかにされた。組み上げたものの4つの面にはそれぞれレリーフ装飾が施されており、そのうちの2面にはジェドの上部が陰刻されていたため、次にはその下部を復原することが課題となった。

3.2 ジェド柱片と壁体隅角部との区別

壁体の隅角部と、独立柱の隅角部との区別はきわめて重要である。この判別の作業は、 ジェドをモティーフとする柱の4つの側面に施されたモティーフの解明と切り離して考え ることはできない。よく似たモティーフが、壁面と独立柱との双方に施されていた可能性 があるからである。細かな寸法の検討をおこないながら、ジェドのモティーフが施された 柱の装飾に関する復原を進め、壁面の装飾との類別がなされた。

ジェドが大きく彫られた柱の断面は長方形で、類例から考えて、幅が広い面を正面側に向けていたと推察される。長辺は $30~\rm{cm}\sim 33.5~\rm{cm}$ 、短辺は $23.5~\rm{cm}\sim 24.5~\rm{cm}$ で、柱の高さについては不明であるものの、おおまかな高さは復原することができ、 $176~\rm{cm}$ ほどと見積もられる(Γ 5. 考察」の項を参照)。この角柱は基本的に一本の石から造られたらしく思われるが、上端の様相から推測するならば、平たい石を載せて、高さの最終的な調節をおこなったと考えることができる。

レリーフには未完成の部分が見られた。また白いモルタルを厚く塗って表面の不陸を修正し、そこに陰刻が施されている場合も観察された。かなり大きな石材が用いられているという点は、タの墓の上部構造の全体的な特色でもある。最終的な加工が終わっていない石材も見つかっているが、比較的大きなかすがいを嵌め込むための窪み穴、またパレス・ファサードの凹凸が施された痕跡などが散見される。近くにはセンウセルト3世のピラミッドやマスタバ墓も建っており、大型の石材を用いていたはずの中王国時代の建物から石材

を運び込み、これらを再利用したことがおおいに疑われる。

3.3 ジェド柱のモティーフ

角柱の正面と背面のモティーフは、基本的に同じであったとみなされる。両手を顔の高さまで掲げて礼拝の姿をとった神官タの立像の肩位置に載るかたちで、ジェドのモティーフが大きく描写されていた。ジェドのモティーフの柱身には文字列が記され、またその両側にも縦に文字列が一列ずつ刻まれていたと思われる⁽³⁾。ジェドの頂部にはさまざまな神の姿があらわされていたようで、詳しい説明は個別の断片に関する説明に譲ることとする。

なお、両側面にも神官夕の立像が描かれるが、片手に長い軍旗の棒を立てて持ち、残る 片手を顔の前に掲げるという違いが認められる。この神官の頭の上には、夕の称号と名前 を含む文字列が一列、上から下に向かって刻まれている。正面や背面の文字よりも、側面 に記された文字の方が若干大きい点は、見逃すべきではない。

正面・背面にあらわされた立像と、両側面に描写された立像にはこの他に、側面に描かれた立像の方がわずかに小さいという差異がある。また、浮彫彫刻は全体に陰刻で施されているが、正面・背面の場合には肩位置にジェドが載るため、被葬者夕の顔、首、肩はジェドを背景として陽刻で彫出されるという大きな違いがあった。

こうした点は些細ではあるが、角柱の正面・背面と側面との識別とともに、壁体のレリーフとの区別をおこなう際、非常に役立った。

3.4 ジェド柱の位置とモティーフの向き

モティーフの特徴を述べたので、平面の形状からあらかじめ考えられることを記しておきたい。類例から考えて、この角柱は中央の奥に設えられた至聖所の前面、すなわち中庭の奥に立てられていたであろうということを前述した。夕の墓の平面と規模から考えて、角柱の数は偶数であり、柱の間隔を考慮するならば6本よりも4本と想定した方が妥当であろうと判断される。中庭の奥には戸口が3つ並んでおり、これは神殿型貴族墓において典型的な形式である。もし柱が6本であったと想定すると、柱の間隔が戸口の位置と合わず、戸口の前に邪魔な柱が立つ姿を考えなければならないからである(図1、平面図を参照)。クルナのセティ1世葬祭殿のように、不揃いな戸口の位置に合わせて柱の位置を微妙にずらすということは、神殿型貴族墓の場合にはうかがわれないように思われる。規模が非常に大きな場合の建物では、柱を均等の間隔で立てなくてもそれほど目立たなかったであろうが、新王国時代の貴族墓のような規模であるならば、格式の点から見ても、柱をきちんと同じ間隔で揃えるという計画は心がけられたであろうと推測される。

他にも触れておかねばならない重要な点がある。各面にあらわされる立像や文字の向き には、一定の法則が存在するということである。

J. van Dijk によれば、ジェド柱の装飾はオベリスクの場合と同じように、正面と背面では建物の中央の軸線の側を向き、また両側面は建物の奥を向いているという⁽⁴⁾。これを踏まえるならば、正面とは幅の狭い両側面の画像や文字列が、ともに奥を向いている時の

手前の面に相当する(図2)。

便宜上、ここでは平面図において入口から奥に向かって見ることを想定しつつ、中庭の奥に並ぶ角柱の手前側の面を A:正面とし、以下、反時計回りの順序で B:右側面、C:背面、D:左側面と呼ぶこととする。この法則に基づいて、出土したジェド柱の断片が、もとは中央奥室戸口に正対した際の右にあったか左にあったか、すなわち遺構の北側かそれとも南側にあったのかを判別することが可能となり、以下に述べる個別の断片の説明においても大切な視点となろう。ジェドをモティーフとする柱のコーナー片は、必ず正面と側面、あるいは背面と側面のどちらかを必ず併せ持つはずである。従って、どちらに属する面なのかが判別されて、しかも被葬者や文字列の向きも分かった場合には、北側にあった柱か、あるいは南側の柱かを言い当てることができることになるからである。

因みに、夕の墓からは円柱が一本だけ、出土した(図 3)。最後の全体的な復原に関連するため、先に記述しておきたい。丸い円柱礎石も小片がいくつか出土しているが、この円柱に属していたと考えても差し支えない曲率を示す断片であった。

ほぼ中央で 2 つに割れた円柱で、接合した高さは 74 cm + 71 cm = 145 cm, 上端直径 $25.9 \text{ cm} \sim 27.2 \text{ cm}$, 下端直径 $34.0 \sim 35.0 \text{ cm}$ である。銘文帯に正対して見る時の円柱の幅は、わずかに奥行き方向の寸法よりも小さく、断面は完全な正円ではないことが了解される。柱身の高さは柱の底面の直径のほぼ 4 倍強に相当する。底面の直径 35 cm という値はまた、 $5 \times 5 \times 2/3 \times$

柱が先細りとなる度合いの値を求めるならば、最大で(上面直径 – 底面直径)/高さ= (34-27.2)/145=6.8/145=1/21.3、また最小で (35-25.9)/145=9.1/145=1/15.9 である。

銘文帯の幅は8cm, 左向きの文字列で、夕の名前と彼の称号を含んだ行が続く。途中に矩形のパネルが挿入されるかたちとなっており、その高さは36.5cm, 柱上面との間隔は17cm, また幅に相当する円弧の長さは46cmで、これは円柱を半周する長さに当たる。

パネル内のモティーフは左を向いたアヌビス神の座像と、膝をつき、これに向き合って 両手を掲げる神官タの礼拝の姿で、モティーフと文字列の向きからは、この柱が中央奥に 位置する至聖所内の北側に位置していたことが示唆される。

上面と下面の双方には鑿による荒い仕上げ痕が残存しており、特に下面にはピンク色のモルタルも一部、残存する。上端と根元には一部、欠損がうかがわれる。これを補填する断片は未だ見つかっていない。柱の基部にはパピルス柱に特有の文様が8葉分、刻線で描出されているが、柱底面よりも8cm上げられた位置の水平線から始められている。彩色痕はうかがわれなかった。部分的にピンクのモルタルによる補修箇所が見られる。

当初の高さを保ったままの柱の出土は重要で、それは柱が立てられていた部屋の天井高さが示唆されるからである。この場合、上に載せられていたはずの柱頭が失われているため、類例によって推定する他はないが、礎石の高さを含めても、ジェド柱よりも高くなることはないと見られる。

4. ジェドをモティーフとする柱の断片

石灰岩製の各断片には、発掘時に固有の番号が付記される。例えば 9o は第 9 次に出土 したことをあらわす。数年にわたって次々と見つかった断片が接合されたことが了解され るように、この遺物番号も併記しておく。

断片 1 (9o246+9o392+9o437+9o630+9o184+9o251+9o316+10o135+11o083) 幅 34.4 cm, 奥行き 23.6 cm, 高さ 63.5 cm (図 4)。

この柱の頂部を構成する 2 つの断片 90246(大)と 90392(小)は,その下の一材からなる長いジェド柱の上に,おそらく寸法調整のために付加されたものである。 2 つの平たい石材の厚さは約 16.5 cm ほどであって,両者の断片はわずかな範囲において接合するとみなされた。

90392 の下面には仕上げのための荒削りの鑿跡が残る。一方,その下に位置する 90630 の上面にはピンクのモルタルが残存しており,上に載せられていた石材の底面の形状を比較的良く伝えている。断片 90392 が 90630 の上に載ると推定される当該箇所との接合に関しては大きな矛盾がなく,この理由によって 90630 の上に 90246 と 90392 の両者が置かれていたと判断された。

A:表面はジェド柱の上に牡牛の角が彫出されたものの、このモティーフが後には削り取られようとした鑿の痕跡を伝えている。C:背面にはふたつの駝鳥の羽飾りの描出が観察された。

D:右側面では左側に頭部に日輪を載せたホルス神が描出されたと思われるが、その鑿跡は荒く、表現は未完成のままに終わっている。その右側には「オシリス(3sir)」の文字が下書きとして試みに若干彫られたらしい痕跡がうかがわれる。この「オシリス」の文字の次にはいくらかの空白が置かれ、石材の継ぎ目のある箇所のすぐその下には「プタハ神の $(n\ pth)$ 」という文字がはっきりと看取される。この文字列はしかし、石灰岩の上に厚く塗布された白いプラスターに陰刻されていた。他にも出土しているタの称号を勘案するならば、空白部分には「神官」をあらわす言葉のひとつ、「 $wb\ hry-hbt$ 」が記されていたと推定されよう。

ただし、上述の「オシリス」の文字の下書きは石灰岩の建材にかすかな刻線として残されており、他方で空白を挟んですぐに続く「プタハ神の」という文字は、「オシリス」の文字の下に置かれた別の石材の表面に施されるプラスターを削り込み、なおかつ明瞭に彫られているという相違が見られる。このような大きな差異が何故生じたかは不明である。

C面ではジェド柱頂部がA面よりも詳細にあらわされていた。また、D面では青の彩色痕が残存する。上端に載せられた石材に相当する90246+90392の下面では、平滑に仕上げられた痕跡を有し、再利用材であることが了解される。

断片 2 (90601+90612+90646+110088)

幅 29.5 cm, 奥行き 17.0 cm, 高さ 41.5 cm (図 5)。

A:表面は人面を持つ 2 羽の鳥のモティーフを示す $^{(5)}$ 。 C:背面は完全に失われている。 両側面の文字列は、「プタハ神官(w $^{(b}$ n p t h)」という肩書きをあらわすが、D:左側面の下部で見られる「金細工師の長 (hry nbyw)」の肩書きは興味深い。

断片 3 (90611+90591+90601+90441+110159+110082)

幅 27.1 cm, 高さ 41.3 cm, 厚さ 7.2 cm (図 6)。

被葬者の立像をあらわしたコーナー片である。人物像は隅角部を挟んで向き合っていたことが、キルトの裾の角度などから推定される。幅が27cmを超えており、この面が背面であったと考えられる。

断片 4 (90608+100092)

幅 12.5 cm, 高さ 19.3 cm, 厚さ 3.5 cm (図 7)。

上部にはジェド柱の柱頭を構成する 4 本の横棒のうち、一番下の 4 本目の左側が確認される。断片の右側にはジェド柱の柱身が一部、うかがわれる。その左には縦に記された左向きの文字列が 1 行観察され、「オシリス(3sir)…」と読まれる。「ts」の文字には青色の彩色痕跡が認められた。

部分的に文字の端部が残存しており、左を向いた「プタハ神の (n pth)」という文字列の右方の部分であろうと考えられる。従ってこの断片は北側に立っていたジェド柱の断片であり、正面と左側面が出会う部分の隅角部であると判断される。

これはまた、ジェド柱の浮彫の横に、縦書きの文字列があったことを示す断片である。 ジェド柱の両側に1行ずつの文字列が記され、また浮彫のジェド柱の柱身にも文字列が刻まれていたことが別の断片によって示されており、ジェド柱の正面と背面には合計で3行の文字列があったことが知られる。この断片の A:正面に書かれたものは、そのうちの第1行目の文字列に相当する。

断片 5 (100136)

幅 14.8 cm, 高さ 15.7 cm, 厚さ 12.9 cm (図 8)。

コーナー片で、両面に文字が記されている。大きさが異なり、左向きの「ウワジェト (wd3t)」が書かれている方が小さく、こちらの面が A: 正面で、右向きの「i」の文字が書かれている方が B: 右側面であろう。よって北側に立っていたジェド柱であったと判別される。

正面に書かれた「ウワジェト」の文字は、神官タの称号の一部として他にも出土しているが、ここでは青色の彩色痕がうかがわれた。

側面で観察される、「i」の文字を含む例は、ジェド柱の他の側面に記された文字列に見ることができない。また「i」の前方に刻まれた、太い縦棒を持つ文字も不明である。

断片 6 (90485+90539+Shaft 40 [RoomC])

幅 10.2 cm, 高さ 16.2 cm, 厚さ 1.3 cm (図 9)。

コーナー片。右を向いた縦書きの文字列における最後の部分で、夕の名前と「声正しき者 (*m3*° *hrw*)」の文字が記されている。青の彩色痕がわずかに観察される。

ピンク色のモルタルで作られており、石灰岩の柱の欠損部を埋めたモルタル部分に刻まれた文字列であろうと考えられる。右側には浮彫のジェド柱の、次第に太くなる下部の輪郭が示されている。従って、正面あるいは背面に記された3行の文字列のうちの第3行目に該当すると推定がなされる。

断片7 (90605+90610+90627+90639+90626)

幅 20.4 cm, 高さ 55.8 cm, 厚さ 20.1 cm (図 10)。

被葬者が隅角部を挟んで向き合うモティーフである。左向きの人物像は棒を手に持っているから、この面が左側面と判断される。残ったもう一方の面にうかがわれる人物像は右向きであり、また顔が陽刻となっているので、もとはこの背後に浮彫のジェド柱が彫られていたことが了解される。従って、この断片は北側に立てられていたジェド柱の、C:背面とD:左側面とを残すものであることが知られる。

同じモティーフは 110096+110101+110084+110085 [+90379] でも観察された。北側に少なくとも 2 本のジェド柱があったことが示される。

彩色痕は見つからなかった。

断片 8 (90699+90601)

幅 9.8 cm, 高さ 9.6 cm, 厚さ 3.1 cm (図 11)。

ジェド柱の柱頭部、左側を示す。ピンクのモルタルでできており、石灰岩の表面を平らに均すために塗布されたモルタルに陰刻がなされた破片であると考えられる。ジェド柱の柱頭部は間隔を開けて平行に並べられた4本の横棒から構成されるが、この断片でも2本の横棒が確認される。

この断片の最上部の横棒の下には赤い彩色が、また断片のほぼ中央部を横切る横棒の下には青色がわずかに残存する。類例ではジェド柱の4本の横棒のうち、2本目の下が赤く塗られている様子がうかがわれるため⁶⁶、このレリーフ片は2本目と3本目の横棒を示した部位に該当すると推定される。

横棒と横棒との間には縦に刻線が細かく入れられているが、夕の墓におけるジェド柱の同じ部位では、この線が施されていない場合が少なくない。

断片 9(11o096+11o101+11o084+11o085「+9o379〕)

幅 12.9 cm, 厚さ 10.8 cm, 高さ 66.8 cm (図 12)。

隅角部を挟み、神官が向き合うモティーフである。左向きの被葬者の片手には棒が握られているから、この面が左側面であることが了解される。残ったもう一面は右向きである

ために背面となり、この断片はかつて北側に立てられていたジェド柱の一部であったと判別することができる。

背面には右を向いた縦書きの文字列がうかがわれ、神官タの称号を比較的長く残す例となっている。この文字列の上には「オシリス(3sir)」という文字が記されていたであろう。タの名前が入っていないのは、この文字列が背面における第1行目に相当するためであると考えられる。同様のモティーフは断片7でも見ることができ、北側に2本のジェド柱が存在したことを伝えている。彩色痕は見られなかった。

なお、これは断片 16 (90379) と接合する可能性がきわめて高く (図 13)、この結果をもとにして 90379 もまた北側のジェド柱片であったと推察される。

断片 10(9o396+10o124)

幅 27.4 cm. 高さ 40.8 cm. 厚さ 21.3 cm (図 14)。

被葬者のほぼ胸位置から膝高さぐらいまでをあらわしたものと考えられる。右向きであることは明瞭である。一面しか残されていないレリーフ面であるが、幅がすでに 27 cm を越えており、さらに右方に続いていたはずの掲げた手の長さを勘案するならば、ジェド柱の側面に彫出された立像だとは思われない。他の例では、側面の幅は 24 cm ほどだからである。

側面が残されていないので、北側に立っていた柱か、南側に立っていたものなのかを判別することはできない。彩色は残されていなかった。

断片 11 (9o406+9o601+9o638)

幅 16.3 cm, 高さ 17.8 cm, 厚さ 5.4 cm (図 15)。

コーナー片で、どちらの面にも被葬者の姿の一部が陰刻されている。幅が広い方には被葬者の首、肩と右腕が浮き彫りされている。首と肩が陽刻になっているのは、首と肩の背後にジェド柱が陰刻されていたからである。

もうひとつの面には手しか陰刻されていないが、右向きであることが明白であり、また こちらの面がジェド柱の側面であることが分かる。

従ってこの断片は、元来は北側に立っていたジェド柱であり、C:右側面とD:背面とが構成していたコーナー片であると判断される。9o198 もまた同じモティーフを有しており、重複している点が注目される。北側に立つ柱が少なくとも2本あったことを証明している断片である。

D: 背面の腕部分はピンク色のモルタルから彫り出されている。石材の欠損部をモルタルで埋めて彫出している典型例である。彩色は残されていない。

断片 12 (90198)

幅 13.5 cm, 高さ 40.4 cm, 厚さ 6.7 cm (図 16)。

コーナー片であり、幅が広い方の面には棒を片手に持ち、また他方の手を挙げて礼拝の

姿をとる被葬者の右向きの姿があらわされる。従ってこの面は、ジェド柱の側面に相当する。

残る面には挙げた手が見られず、隅角部に近接して、浮彫されたジェド柱の左側の下端、 及びそのすぐ下には被葬者の後ろ肩が陰刻されているため、この神官夕は右を向いている と判断されよう。

以上の理由から、この断片は北側にあったジェド柱と見なされ、B:右側面とC:背面の一部を残すコーナー片であると了解される。断片11も同様のモティーフを伝えており、このことから北側のジェド柱が2本存在していた点が明らかである。

色彩はまったく残されていない。全体に傷みが激しい。

断片 13 (90601+90615+90628+90635)

幅 13.1 cm, 高さ 30.3 cm, 厚さ 5.5 cm (図 17)。

コーナー片で、幅の広い方の面には左向きの被葬者の後頭部と肩が描かれている。肩の上にはジェド柱の浮彫の右端が彫られており、そのさらに上には神官夕の名前の他に「黄金の館($pr\ nbw$)」と綴られている。幅の狭い方の面には右を向いた被葬者の後頭部と肩が彫出される。よってこちらの面が右側面であり、北側に立っていたジェド柱の A: E面と D: 右側面の一部を示していると判断される。

彩色は残されていない。

断片 14 (9o713)

幅 5.1 cm, 高さ 8.3 cm, 厚さ 2.2 cm (図 18)。

「 $hry\ nbyw$ 」と記されており、神官タの称号の一部を構成すると思われる。ピンク色のモルタルによって作られており、おそらくはジェド柱の欠損部に充填されたモルタルに刻まれた文字列であろうと推定される。人間の足をあらわした文字「b」の下部がかろうじて残存しているので、左向きの文字であると判断することができる。

彩色は残っていない。

断片 15 (90096)

幅 12.1 cm, 高さ 13.1 cm, 厚さ 1.8 cm (図 19)。

左を向いた縦書きの文字列で、「黄金の館の…、夕(…m pr nbw T3)」と記されている。右端が直線状に切れているのは、これが浮彫のジェド柱の左の端を示す刻線であるからである。他所から出土したものと形状が似ており、元来は続いていた可能性が指摘される。

ピンクのモルタルで作られた断片で、類例もいくつか見つかっており、ジェド柱は大部分がひとつの長い石材から切り出されたものの、その一部分にはところどころに欠損部があったことを伝えている。

断片 16(9o379 [+11o096+11o101+11o084+11o085])

幅 30.6 cm, 高さ 34.9 cm, 厚さ 24.6 cm (図 20)。

表と裏にそれぞれ被葬者の頭部とその上に位置する浮彫のジェド柱を彫出した断片である。他の2面は完全に失われている。石材の大きさ、特に厚さの値から判断して、正面と背面が残存しているとみなされる。

肌色の彩色がいくらか残されており、文字にも青色がうかがわれた。

なお、前述したように、この大きな断片は断片 9 と接合する可能性が非常に高い(図 13)。この結果をもとにするならば、正面と背面との区別をおこなうことができる。正面 と判断される面の顔は左を向いているので、この断片も北側に立っていたジェド柱であったと考えられる。

断片 17 (90284)

幅 5 cm, 高さ 9 cm, 厚さ 2 cm (図 21)。

右を向いた縦書きの文字列である。他の断片との相似から、おそらくはジェド柱に刻まれていた文字列の一部であると判断される。正面・背面の文字と側面の文字とは大きさが異なり、後者の方が大きい。この断片の文字は小さい方とみなされるので、おそらくは正面か背面に属するものであろう。

彩色は残されていなかった。

断片 18 (90001)

幅 10.5 cm, 高さ 12.2 cm, 厚さ 2.4 cm (図 22)。

ピンク色のモルタルで作られた断片である。左向きの縦書きによる文字列で、「オシリス、金細工師の長($3sir\ hry\ nbyw$)」と読まれる。右端が垂直に切れているのは、浮彫のジェド柱の柱身の左側が彫出されているからであり、よって正面か背面に記された3行の文字列のうちの第1行目に該当すると判断される。部分的に青の彩色痕が見られる。

形状の似た断片が他所から出土しており、元来は連続していた可能性が指摘される。ジェド柱の柱身に描かれた文字列と、その両脇に記された文字列との判別は比較的容易である。第2行目に当たるジェド柱柱身の文字列は、陰刻によって彫出されたジェド柱へ記されるために、完全に平らではない、緩く湾曲した表面に刻まれることになるからである。

断片 19(10o070)

幅 12.2 cm, 高さ 8.4 cm, 奥行き 11.8 cm (図 23)。

ジェド柱頂部の右側を示すコーナー片である。ただし、もう片方の面には何も描かれていない。

彩色の痕跡は見られなかった。

断片 20 (10o161)

幅 12.2 cm, 高さ 11.0 cm, 厚さ 7.5 cm (図 24)。

浮彫されたジェド柱の柱頭の右側をあらわした小片である。

断片 21 (10o126+10o381)

幅 18.6 cm, 高さ 28.1 cm, 奥行き (側面の幅) 24.9 cm (図 25)。

ジェド柱の基部を示す点で重要である。床から 15 cm ほどの位置に水平線が刻まれ、 足先と踵から人物像の向きを同定することができる。サンダルを履いている立像であるこ とが知られる。

断片 22 (90609)

幅 11.3 cm, 高さ 15.5 cm, 厚さ 5.6 cm (図 26)。

コーナー片で、どちらにも文字列だけがうかがわれる断片である。幅が広い方の面には左を向いた縦書きの「タ、声正しき者($T3~m3^{c}~hrw$)」が記されている。もう一方の面にも、左向きの「 $m3^{c}$ 」の下部と、その下に左を向いた「hrw」の右端が書かれている。

文字列の幅を計ることができたのは広い方の面にある文字列で、これは正面や背面に記されていた他の例の場合と同じであった。神官タのジェド柱の場合では、正面や背面に記された文字列(幅 $5.5\,\mathrm{cm}$ 、両脇の縦線間の幅 $7.5\,\mathrm{cm}$)の方が、側面に書かれた文字列(幅 $6.5\,\mathrm{cm}$ 、両脇の縦線間の幅 $9.5\,\mathrm{cm}$)よりも若干小さく刻まれている。

従ってこの断片は、もともとは北側に立っていたジェド柱に属すると考えられる。

5. 考察

ジェドがモティーフとして施された角柱の断片とみなされるもののうちで、本来、北側に立っていた角柱か、あるいは南側にあった角柱かを、以下の12例において推測することができた。

断片 1 (90246+90392+90437+90630+100135+90184+90251+90316+110083)

断片 2 (90601+90612+90646+110088)

断片 3 (90611+90591+90601+90441+110159+110082)

断片 4 (90608+100092)

断片 5 (100136)

断片 7 (90605+90610+90627+90639+90626)

断片 9 (110096+110101+110084+110085 「+90379〕)

断片11 (9o406+9o601+9o638)

断片12 (90198)

断片13 (90601+90615+90628+90635)

断片21(10o126+10o381)

断片22 (90609)

柱の隅部におけるモティーフの重複を分析した結果、いくつかの例が認められたので、 柱の数は少なくともは2本存在したことが了解されたが、3本以上存在したことを示す証 拠は見つからなかった。また、当初は明らかに南側に立っていたと判断される柱片は皆無 であった。北側に立っていたか南側に立っていたかが判別できる上記の12例の断片に関 しては、すべて北側のジェド柱に属していたと結論される。すなわち北側に2本存在した ことが出土断片からは示されるのであり、痕跡が完全に失われている南側にあったはずの 同数のジェド柱を想定するならば、これらは全部で4本と考えることができる。

先にも記したように、遺構の平面を勘案した場合、全部で4本のジェド柱が中庭の奥に並べられていたという復原は妥当である。全部で6本の柱を想定した時には、柱の間隔が密になり、至聖所両脇の部屋の戸口の前面に柱が立って邪魔になる結果を招く。類例遺構との比較からも、夕の墓には4本のジェド柱が立っていたとみなして差し支えないであろう。

図 27 に C: 背面に属する断片を用いてジェド柱全体の復原をおこなった写真を示す。 A: 正面については出土資料が少なかった。また B: 右側面と D: 左側面も,全体の高さを割り出すことができるような充分なモティーフが残存していない。

C: 背面の全体復原に当たって問題となるのは 3 箇所の欠損部であって、組み文字「オシリス(3sir)」の高さ、神官夕の腕の長さ、またキルトの裾から足がどの程度出るかが、正確に言えば不明である。しかしながら類例が出土しており、推定された全高の誤差があったとしても数 cm の範囲内にとどまるであろうと判断される。全体の高さは約 176 cm と推定される。

南側の柱の断片がどうして出土しないのか、疑問が生じるが、おそらくは未完成であったために、再利用を目的として持ち去られたと考えることもできよう。同じことが中庭を囲む壁体に関しても指摘されるように思われる。

これらの柱が中庭の奥に立つと考え、また1本だけ出土した円柱が祠室に立っていたと考える時、夕の墓の長軸方向の断面図が描けるように思われる。通常の形式に従って、中庭の奥に設けられた列柱部分の天井よりも、祠室の天井は幾分低く設定されていたであろう。

梁材がいくつか発見されており、それらには碑文と図像とが刻まれているから、今後は 各々がどこに配置されていたかを確定しつつ、具体的な断面寸法を推し量ることが可能で あって、より詳しい復原図の提示も期待される。

かつて報告がなされているように、この墓の中庭に見られる壁面のレリーフは非常に特異であり、注目がなされる。残念ながら壁体基部が失われているため、中庭を囲んでいた 当該壁体の高さを直接知ることはできないが、コーニス部分の上端が残存しているため、 断面計画の推定からこの部分の壁体の高さを割り出すことは、今後の課題として検討され るべきであろう。基本的な寸法値を勘案するならばコンピュータ・グラフィックスを用いて提示することもでき、多くの部分が失われているこの遺構の全体像を構築することもできそうに思われる。

小さく砕かれて発見された石灰岩の破片の接合作業を端緒として、地上に構築された建物の全体像を提示する構想までを例として示した。この墓の地下構造についてはまた別の考察が用意されなければならないが、そこでは新たに見つかったダハシュールの墓域全体の様相にも関わる問題が討議されるはずである。

謝辞

2009年の夏におこなわれた第17次ダハシュール調査においては、サイバー大学の学生諸君、小栗孝昌さん・鬼丸洋之さん・小野寺元気さん・川村由恵さん・瀬尾重乃さん・武石美徳さん・帝原瑠紫明さんによる助力を得た。記して感謝申し上げる。

なお本研究は、日本学術振興会による科学研究費補助金:基盤研究 S「メンフィス・ネクロポリスの 文化財保存面から観た遺跡保存整備計画の学際的研究」(課題番号 19100010, 研究代表者:吉村作治) から助成を得た。

註および引用文献

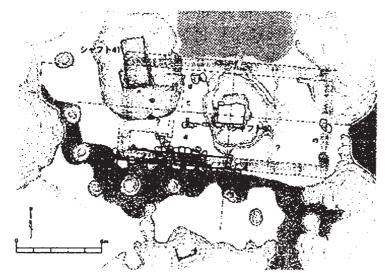
- (1) 調査地域のイパイの墓,シャフトA2からは第19王朝のものと思われる別のジェド柱も出土している。「ジェド柱のレリーフ入り角柱」、『吉村作治の早大エジプト発掘40年展』、アケト、2008年、p. 155、左。タの墓から出土したジェド柱の断片とはしかし、接合することができない。
- (2) Jacobus van Dijk, "The New Kingdom Necropolis of Memphis: Historical and Iconographical Studies", Burgum, 1993, pp. 151–172.
- (3) 浮彫のジェド柱の柱身に1行, その両脇に1行ずつ, 合計3行の文字列が記されて, それらすべてが同じ方向を向いているジェド柱の例としては, Amenmose のジェド柱を参照: Geoffrey T. Martin, "The Tomb-chapels of Paser and Ra'ia at Saggara", London, 1985, Pl. 28.
- (4) J. van Dijk, op. cit., pp. 151–152.
- (5) 類例として Khonsu-Pawadj のジェド柱: J. van Dijk, op. cit., pp. 154-155, Fig. 25.
- (6) The J. Paul Getty Museum and The Getty Conservation Institute, "In the Tomb of Nefertari: Conservation of the Wall Paintings", Malibu, 1992, *passim*; F. Ll. Griffith, "A Collection of Hieroglyphs: A Contribution to the History of Egyptian Writing", London, 1898, *passim*.

参考文献

- 1. Jacobus van Dijk, "The New Kingdom Necropolis of Memphis: Historical and Iconographical Studies", Burgum, 1993.
- 2. Geoffrey T. Martin, "The Tomb-chapels of Paser and Ra'ia at Saqqara", London, 1985.
- 3. The J. Paul Getty Museum and The Getty Conservation Institute, "In the Tomb of Nefertari: Conservation of the Wall Paintings", Malibu, 1992.
- 4. F. Ll. Griffith, "A Collection of Hieroglyphs: A Contribution to the History of Egyptian Writing", London, 1898.
- 5. Henry George Fischer, "The Orientation of Hieroglyphs, Part I: Reversals", New York, 1977.
- 6. 小岩正樹・西本真一・中川武・柏木裕之・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・馬場匡浩,「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について13:タの神殿型貴族墓」,日本建築学会大会学術梗概集,2004年8月,pp.525-526。

エジプト・ダハシュール北遺跡における神官タの神殿型貴族墓のジェド柱

- 7. 西本真一・中川武・柏木裕之・小岩正樹・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・馬場匡浩,「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について 14: タの神殿型貴族墓から出土した建築片」,日本建築学会大会学術梗概集,2004 年 8 月, pp. 527-528。
- 8. 小岩正樹・西本真一・中川武・柏木裕之・吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・馬場匡浩,「ダハシュール北部で発見された新王国時代の建造物について 15: タの神殿型貴族墓の断面復原案」,日本建築学会大会学術梗概集,2005 年 9 月,pp. 423-424。
- 9. 和田浩一郎,「サッカーラにおける新王国時代の free-standing tomb-chapel について」, エジプト 学研究第 4 号, 早稲田大学エジプト学会, 1996 年, pp. 58-74。



タの神殿型貴族墓 現況平面図および推定復原図

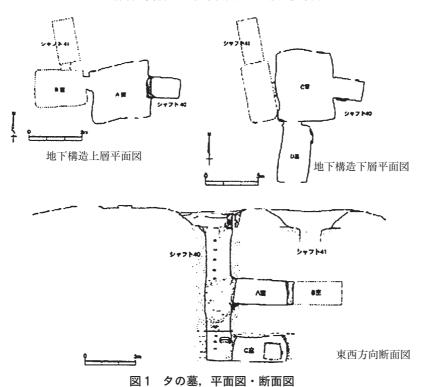




図3 出土円柱

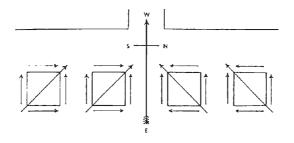


図 2 ジェド柱の向き(van Dijk による)

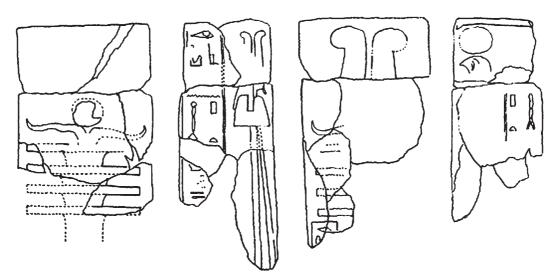
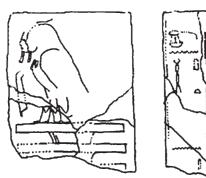
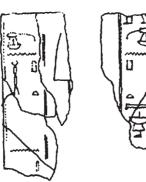


図 4 断片 1, 左から A:表面, B:右側面, C:背面, D:左側面





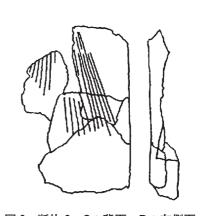


図 5 断片 2, 左から A:表面, B:右側面, D:左側面 図 6 断片 3, C:背面, D:左側面





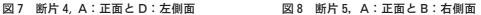




図 9 断片 6

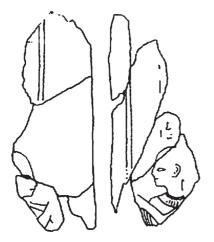


図10 断片7, C:背面とD:左側面



図 11 断片 8

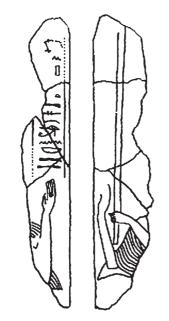


図12 断片9, C:背面とD:左側面



図 13 断片 9 と断片 16 との接合



図 14 断片 10

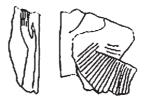


図 15 断片 11, B:右側面と C:背面

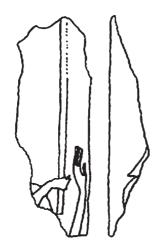


図 16 断片 12, B:右側面と C:背面



図 17 断片 13, A:正面とB:右側面



図 18 断片 14



図 19 断片 15



図 20 断片 16, A:正面とB:右側面



図 21 断片 17



図 22 断片 18



図 23 断片 19



図 24 断片 20



図 25 断片 21,

A:正面, C:背面, B:右側面



図 26 断片 22, D:左側面と A:正面

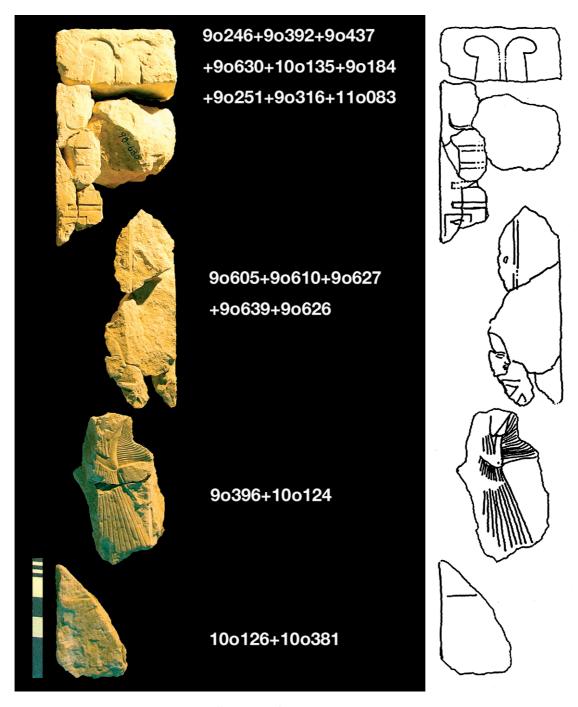


図 27 夕の墓, 北側に立つジェド柱, C:背面の復原

Djed-Pillars at the Tomb-Chapel of Priest Ta in Dahshur North, Egypt

Sakuji Yoshimura, Shinichi Nishimoto Masahiro Baba, Ken Yazawa

A number of fragments belonged to the *djed*-pillar, one of the characteristic architectural expression in the Ramesside period, have been found at the site of the tomb of Ta in Dahshur north cemetery through the recent excavation works by the joint expedition of Waseda University and Cyber University. Re-assembling work on the architectural pieces with considering the direction of the hieroglyphic inscriptions as well as the standing figure of the tomb-owner of this tomb represented in the sunk-relief leads the result that two pillars must have originally been erected on the north side of the tomb. It is natural to regard that the same number of *djed*-pillars should be reconstructed on the opposite side, and a total of four pillars seem to be installed at the innermost part of the square court of this tomb-chapel.

Keywords: New Kingdom, Saqqara, Cemetery, Reconstruction, Architecture.